一本のペンの先には

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一本のペンの先には

【Nコード】
N7612G

【作者名】
春月桜

【あらすじ】
先輩のことを好きな唯(ゆい)。でも、先輩とは校舎が遠くて見たくても見れない。そんなある日だった…

（前書き）

同じような言葉が出ることもあると思いますのでそのへんはご了承ください。

プロローグ

私は安土（あづち）　唯（ゆい）。

高校一年生。

普通のですよ？

特徴全部を言うのは大変なんですができるだけ詳しく説明します。

肌は少し黒くて日焼けしちゃってます。

いつも夏場は大変なことになってます。

髪の毛はショートカットで髪の先が少しだけはねています。

不良的に見えますけど。

天然の茶髪です。

鼻が少し高くて唇は淡く赤色をしています。

結構外国人？

右耳には小さめの紫の石のハートの形をしているピアスを一つだけつけています。

ネクタイの上にはピアスとおそろいのネックレスを重ねています。

色の紫が大好きなんです。

可愛くてすごくお気に入りのものなんです。

私の紹介はここまでです。

あまり詳しくは無いんですがわかってくれたら嬉しいです。

実は私は好きな人がいます。

でも、決してみんなが応援できるものではないので誰にも言ってません。

その人は先輩なんです。

淦月（あかつき）　黄衣知（きいち）という同じ高校の二年生です。

肌が白くて目が茶色。

髪の毛も茶髪で染めているらしい。

私と少し似ている茶髪です。

鼻が高くて唇は綺麗な桃色。

両耳に一つずつ円い青色の石が入っているピアスをつけている。

ネクタイの上には青色の星のネックレスをしている。

成績優秀、スポーツ万能、おまけに美形ときたもんだから女子のほとんどがファンに入っているというほどのモテモテな先輩なのです。

私はその人を追ってこの高校に入ったの。

だけど、二年生の校舎は遠くて会えるときなんてまずない。

入った意味がないも同然なんだけど、高校自体は同じだからそれだけでも嬉しいんだ。

はあー。

毎日がつまらない。

・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・

ある日、いつものように登校しているときだった。

ん？

何だ？

私が見た先には紫色のペンが道端に落ちていたのを見つけたのだ。

お！！

ラッキー！！

新しいやつじゃん。

私はそれを拾い眺めた。

誰か落としたのかな？

誰だろう？

私がそう思いながら眺めていたら…

「あ！！！拾ってくれたんだー！！！ありがとう！！！！よかったー新しく買ったから。」

いきなり目の前に現れたのはなんと！！！私の憧れてたあの淦月先輩だった。

え？？？！！！

私は目をこすった。

これ夢？？？！！！

それとも幻覚？？？！！！

話せるなんてありえない！！！

私はパニック状態になった。

「あの、大丈夫？あ、君俺と一緒の高校なんだ。」

先輩は驚いた顔で私に笑顔で言ってきてくれた。
私はすごくドキドキしていた。
「は、はい。」
私は小さい声で笑って言った。
夢みたいー！！！
私は心の中で嬉し涙を流していた。
「じゃあ、一緒に行こう！！」
先輩は笑って誘ってくれた。
カッコイイ！！！
私は心の中ですごく感動していた。
「は、はい！！」
私は大きな声で応えた。
こんなときがくるなんて、なんて幸せなんだろう。
私と先輩はいろんなことを話した。
そして、話しおえて教室に行こうとしたとき。

「あ、そうだ。この紫のペンあげる。」

いきなり先輩に今朝のペンを渡された。

私は一回ポカンッと口を開いてしてしまった。

「え、これ。買ったばかりじゃ…」

私が言いかけたときにさえぎられ。

「いいから使って。君見た感じ紫色好きそうだから。実は俺も好きなんだけどね。またどこかで会おう！！」

先輩はそう言って走って言ってしまった。

え？

いいのかな？

何か使いづらいかも。

私は紫色のペンを筆箱の中に入れながら教室に向かった。

・・・・・

昼休み…

やっぱり返したほうがいいかも。

私はそう思い二年生の校舎のほうに行った。

先輩は確か二年三組だったはず。

私は先輩のことを少しは知っているのです。

まあ、好きな人のことは普通に考えれば調べますよね。

そして、二年三組の教室の前にきた。

そしたら…

淦月先輩が一人の眼鏡をかけた女子と楽しそうに話していた。

私はその光景を目にしたとき苦しくなった。

先輩に彼女とかいるのは当たり前だよね。

私のことなんてきっと眼中にないよね。

私は落ち込みながらトボトボ歩いた。

教室でおとなしくいればよかった。

私がそんなふうに考えている途中だった。

「ねえ、君って一年生だよね？何で二年生の校舎にいんの？暇なら遊ばない？」

いきなり二年生の知らない男子にそう言われた。

私は嫌だったので…

「やめてください。」

私は肩に乗っている腕を振り払った。

何この人達なんか気持ち悪い。

私は少し怖くなった。

「は？一年の女子が調子乗ってんじゃねぇぞ？力で男に勝てるわけねぇだろうがよ？」

一人の男子が私に向かって怖い顔で言ってきた。

私は怖くなり逃げ出そうとしたけど、他の男子の二人囲まれてしまった。

うそ。

私は手が微かに震えてきた。

そんなときだった。

ガンッ

いきなり目の前の一人の男子に頭を蹴ってきた男子が現れた。

「あ、わりーわりーわりー。通れなかったもんで。」

その人は頭をかきながら笑っていた。

なんとその人は私の憧れている先輩。

淦月先輩だった。

何で？

先輩が？

さっき教室にいたよね？

私は頭が混乱してきた。

グッ

いきなり先輩が私の手を握ってきた。

え？

私は顔がすごく熱くなったのを感じた。

「逃げるよ。」

先輩が耳元でそう言った瞬間。

グイッ

私の手を先輩が引っ張った。

うわっ

私は心の中でそう言って連れられて走った。

・・・・・

「ここまでくれば大丈夫。」

先輩は息を切らしながら言ってくれた。

バックンッ

心臓が大きく脈を打っている。

先輩の手から私の心臓の音が聞こえちゃいそう。

先輩の手はゴツゴツしてて大きくてあたたかくて。

なんだか幸せな気分になる。

私は先輩の手を眺めていた。

息が切れていることも忘れさせた。

「あ、ごめん。」

先輩はそう言って私の手をほどいた。

私はちょっと悲しくなった。

手から温度が消えた感じがした。

「二年は柄が悪いの多いから気をつけてほしいんだけど。で、何でここにきたの？」

先輩は私の顔を覗き込みながら尋ねてきた。

私は顔を真っ赤に染めた。

近っっ！！！！

私は頭が混乱してきた。

「こ…これを…返しに…。」

私は先輩に強く握っていた今朝のペンを差し出した。

私は目を逸らしながら小声で言った。

「え？これ、あげるって言ったじゃん。」

先輩は驚きながら私に言ってきた。

私はうつむきながら…

「や…やっぱり…新しいから…使いづらいなっと…思ったから。」

私は途切れ途切れになりながら言った。

すごい心臓が痛いんだけど。

私はドキドキしている心臓に痛みを覚えた。

「あ、そうなんだ。紫色が好きなんでしょ？安土さんって。」

先輩は笑いながら私が持っていたペンを眺めながら言った。

今、なんて言った？？

私の名前呼んだよね？

「ずっと見てたんだよね。」

先輩は私の頬に触れようと手を差し伸べてきた。

バッ

私は思わず振り払ってしまった。

え？

何で私振り払ったの？

別にいいじゃん。

先輩なんだから。

何で？

私は自分でも驚いていた。

私はいつのまにか一粒の雫が頬を伝っていた。

「せ…先輩は…彼女がいるんじゃ…ないんですか？」

私は泣きながら先輩に聞いた。

知りたくない。

知ったら、きっともう先輩には近づけない。

なのに…

聞いてしまった。

「いないよ。」

先輩の一言に時が止まったように感じた。

今のって?

「じゃあ、さっきの教室で話してた人って誰ですか？？？」

私は胸が苦しくなった。

締め付けられるように感じた。

「その人は学級委員だよ。今度の行事のことで話してただけ。ずっと好きだった。中学の時に入学したての一年生の中で君が頭に残っ

て離れなかった。それから目で追うようになった。いつの間にか好きになってた。君には好きな人がいるかもしれない。一つ歳も違うし。でも、諦め切れなかった。」

先輩は力が抜けたのか座り込んでしまった。

きっとよっぽど大きく抱えていたに違いない。

それほど空気でも伝わってくる。

「私の好きな人は…目の前にいる人です。」

私は座っている先輩の前に座り、そう伝えた。

いつか伝えたいと思った言葉。

きっと先輩に届いたよね？

先輩と目が重なり合う。

そして、静かに唇も重なった。

・・・・・

一本のペンの先には白い紙。

そして紫のペンで書こうよ。

君とのこれから作り上げていく物語も。

一緒に……

・・・・・

終わり……

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
他のも読んでいただけたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7612g/

一本のペンの先には

2010年12月18日03時14分発行